

三井住友海上管弦楽団 女子マラソン・女子駅伝・女子柔道に追いつけ

三井住友海上管弦楽団代表

大島弘安

1. 会社の理解と援助
2. 現役社員とOBの理解
3. 楽団員の音楽を愛する心と熱意
4. 楽団幹事と運営委員の責任感と熱意

ここにあげたことは、創部以来、活動の継続と発展を支えた原動力である。

振り返ると、どれ一つが欠けても、今の三井住友海上管弦楽団にはならないであろう。

当オケは、来年初部十五年となる。サントリーの大ホールで、ベートーヴェンの「第九」を演奏する。指揮者やソリストはプロにお願いするが、演奏は当オケ、合唱は社員やOBが中心となる。

このような演奏会が持てるのは、なんとなくでも冒頭にかかげた原動力が、四拍子そろっているからである。

管弦楽団の歴史

当オケは、大正海上が三井海上に社名変更した一九九一年に、今から思えば会社の厚い支援を受け、社員有志によって発足した。会社から、ティンパニー、大太鼓、その他打楽器、コントラバス、等を寄贈頂いた。その後も練習や楽器の保管について、会社施設の利用を認めてもらっている。

一緒に発足した女子駅伝は世界と日本でトップクラスの成績を残しているのでご存知の方も多いと思う。また住友海上にあった女子柔道部にはオリンピックで活躍している名選手が多く在籍している。このようなスポーツ文化活動が新会社の活動に、プラス効果をもたらしていることは間違いない。

管弦楽団は設立と同時に二つの独自のキ

を創り出した。一つは組織の会則、もう一つは賛助会という組織である。会則は、目的・組織・会員・総会・代表・幹事・運営委員・会計等が細かく記載されている。一度実状に合わせて一部改定したが、良く出来ていると自負している。

当初の設立メンバーである先輩たちの苦労は大変であったと聴いているが、音楽を愛する発起人がいたからこそ現在に繋がっている。演奏をしている時、駅伝のたすきを前走者から受けて走っているように感じている。

身近な仲間にもこのような熱意を持つ人が多く見られるのは、お客さまの財産をお守りするという熱意や責任感に由来していると思う。第一回の演奏会は駿河台本社ビルの一階大会議室で「未完成」を演奏したと聞く。最初の演奏会を開いた勇氣と熱情と識見は、ただならないものがあつたと思う。

演奏活動を振り返る

今までの演奏活動を振り返ると、最初は社内での会議室（とはいっても三百名以上収容できる）から始まり、その後団員も練習回数も増え、年に一度全国から会社の研修施設に人が集まり合宿をするようになり、次第に組織化スケジュール化が活発になった。

会社に隣接するカザルスホールで数回の定期演奏会を開催した後、第一〇回の記念演奏会は池袋の東京芸術劇場でおこなった。

演奏会のお客さまは、賛助会会員、社員の仲間同僚、先輩後輩、家族、代理店、取引先、アマチュア・オケの知り合い、メンバーの友人（多くは出身大学オケの仲間）といった方々である。

定期演奏会以外では、老人ホーム等への訪問演奏と会社行事への出演が中心だが、地方に勤務する団員がその土地の施設、例えば幼稚園あるいはチャリティ・パーティー等に出演することも多い。

また得意先の紹介でプロのソプラノ歌手を迎え、ミニ・コンサートでオペラのアリアなどを伴奏演奏、某地方銀行の大ホールを借り、その地域にある当社支店の五〇周年記念行事として演奏会を開催、海上保険連合世界大会で外国の皆様の前で演奏、東アジア保険会議（国際フォーラム）で演奏等々、多彩な活動を行ってきた。

一〇周年記念演奏会はサントリーホールの大ホールでピアノリストの仲道郁代、指揮者の渡辺一正両氏を招き、「シューマンのピアノ・コンチェルト」「ブラームスの交響曲第四番」等を演奏した。

会社統合の記念演奏会は東京国際フォーラ

ムCにて、「ウェスト・サイド・ストーリー」「ラブソデイ・イン・ブルー」「新世界」を演奏した。

その後の定期演奏会はティアラこうとう、紀尾井ホール等で行ない、現在は二年に三回程度、後者をメインに開催している。

本年二月は一八回定期演奏会を当社が名古屋に所有する「しらかわホール」で開催し、初の地方公演を行なった。また本年五月は同じ金融グループの三井住友銀行吹奏楽団とのジョイント・コンサートをを行い、ブラスバンドの迫力に負けじと力一杯演奏した。

今回は本年九月二五日に紀尾井ホールで、「皇帝円舞曲」「モルダウ」「ブラームスの交響曲第一番」を演奏する。

来年の四月一六日には、サントリー大ホールでベートーベンの「第九」を予定している。指揮者には円光寺雅彦氏を招き、合唱は当社社員・代理店とその家族友人で三百名を組織し、既に本年七月より合唱の指導をプロの先生から受けている。

賛助会について

三井住友海上管弦楽団賛助会は当オーケストラの活動を支援するため、発足と同時に組織され、物心両面の支援を受けている。賛助

会の会長は当社グループの井口会長CEOにご就任頂いている。実務的な運営は山下副社長と相談している。現在五百余名の会員を有する。

賛助会には事務局があり、管弦楽団の活動に合わせ楽器の購入、トレーナーの招聘、演奏会会場運営支援等のご支援を頂いている。もし賛助会がなければ今日のような活動が出来たかどうか。結論は明快である。

賛助会会員の多くは、OBを含めた当社グループ社員と代理店とその家族である。演奏会をとっても楽しみにして頂いており、毎回の演奏会は三百名近くの方が家族や友人と聴きに來られている。また賛助会会員の方より、多くの演奏メンバーの紹介を得ている。

「サラリーマンでもこれくらい演奏は出来る」をモットーに

練習は月に二回。土曜日の午後二時から五時を基本にしている。場所は会社の会議室や社員食堂を利用し、机と椅子を全員で移動させて練習のスペースを造る。

一年間のおおまかな活動は、期首の年次総会で役員改選等の代表・幹事・運営委員長等を選出し、年間活動計画と前年度総括をし、会社の各種行事への参加、定期演奏会、訪問



演奏等の計画を作成し活動を開始する。

夏は合宿で一堂に会し、練習から懇親会、各人の個人プレイをメインとしたアンサンブル大会（久しぶりの仲間があらかじめ譜面を郵送で交換し、当日演奏し皆で聴いて楽しむ）で親睦を深める。その後愉快的な宴会が研修所の就寝時間まで続く。

当オケは「サラリーマンでもこれくらいの演奏は出来る」をスローガンとして演奏しているが、時には会社に入社したばかりでバイオリンを始めたばかりの社員も直近の演奏会に出演する。

とかく力量や技量がオケでは大切にされるが、一緒に演奏すること、音楽を楽しむことが最も大切としている。しかし、練習不足は皆に迷惑をかけるので練習をするようお願いし、時にはプロの先生をトレーナーにお呼びして、集中的にレッスンを受けることにしている。

そもそも音楽は演奏する人も含め聴く人がいて存在するのだから、楽しく弾いて聴く幸せな時間が過ごせれば良いというコンセプトで運営している。運動部のようにタテ組織で活動する訳ではないから、オケ自体に魅力がなくなればオケ活動は消滅してしまうだろう。

皆で練習場所を手で造り、あまり時間のないうちで前の練習時より少しでも良い演奏をし、後かたづけをする。

ノーサイドの精神で

昨今は仕事の忙しさが増しているが、練習後ストレスを発散させるべく大いに飲み、大いに語る団員を見ると、日頃の裏方の苦勞はどこかへいく。このオケは運営委員・運営委員長・幹事・代表と組織的に上へ行くほど裏方になり、全員無償で良く働いている。

多彩な人間が集まっているので時には熱い意見交換もあるが、演奏会の終了した後は和気藹々とノーサイドの仲間に戻っていく。演奏会が終わった時は感無量。

オケの運営について活動している内にいろいろな事を勉強した。会場との交渉、団員の募集、楽器の購入修理、会社への依頼、会計、賛助会からの助言等々、会社の仕事を通してでは得られない事も多い。

この稿を閉じるにあたり、私の好きな言葉をアレンジして記す。

「オケで演奏して生涯つきあえる友人ができた」

「きちんと演奏することでフェアプレイの精神が身についた」

「練習は不可能を可能にする」

これからもオケ仲間とこの心を共有し、経験を広げていきたい。